

潘之恒における「絃靴」三絃源流説

【要旨】

「絃靴」なる弦楽器の名は、六世紀初頭からさまざま書物に認められるものである。しかしながら、この楽器に関する確実な記述は知られていない。「絃靴・即今之三絃 為張聘夫作」（絃靴・即ち今の三絃：張聘夫氏に捧げてこの文を作る）、という表題の一篇が、明代に潘之恒（一五五六―一六二二）によって著された『亘史鈔』という書物の雑篇・卮言・卷八に認められる。この表題のように潘之恒は、明代の「三絃」の源流を「絃靴」に求めている。又、この潘之恒が校閲し、唐の柳宗元（七七三―八一九）によって著されたと考えられている『絃子記』なる書物がある。『絃子記』は短い四編を収める小さな著作である。

筆者は、この『絃子記』の中に、「三絃」と改題されてはいるが「絃靴・即今之三絃 為張聘夫作」とまったく同じ一篇を発見した。調査の結果、『絃子記』の四編のうち、上記の一篇を含む三編が、『絃子記』の校閲者とされている（潘によって書かれた「卮言」に認められることが判った。この『絃子記』に論じられている、「三絃」や「提琴」といった楽器は、唐代にはまだ現れていないと考えられている。このような混乱によって、これらの楽器の年代が古く見積もられてしまう可能性がある。

筆者はこの「絃靴・即今之三絃 為張聘夫作」の文章の詳細について議論し、「絃靴」が「三絃」の源流であるという潘の考えに、歴史的な根拠がないことを示すものである。

一 はじめに

ある時、私の演奏している楽器「秦琴」の歴史を調べている中で、偶然に柳宗元撰の『絃子記』と云う小さな著作を見つけた。どのように見出したのか今ではまったく憶えていないが、確か国会図書館で別の書物を探している最中だと、記憶している。「絃」と云う文字が気になって中を見ると面白いことに絃楽器の小編が幾つか収められていた。

この『絃子記』は「唐」柳宗元撰、潘之恒閲と記されていて、音楽に関係する短い四編を収める著作である。初めに「箏郭師」の一編、次に校閲者とされている明の潘之恒撰「附馬手樂」、続いて「提琴」「三絃」の二編、計四編から成っている。

只、『絃子記』が柳宗元の著作であるならば、「附」と記してあっても、潘之恒撰の「附馬手樂」一編が混ざっている事は非常に不自然である。また通説では「提琴」や「三絃」という楽器は唐代にはまだ存在しなかったとされているため、潘之恒撰の「附馬手樂」以外の三編が本当に柳による文なのか甚だ疑問である。

調査の結果、「箏郭師」の一編は柳宗元の別集『唐柳河東集』（明・蔣之翘輯注）外集巻二に、「箏郭師墓誌」と題して収められていて確かに柳宗元の文であった。一方、潘之恒の著作である『亘史鈔』雑篇・卮言・巻八、『亘史・天啓版』の雑篇・巻五・文部、及び『鸞嘯小品』巻二に、「附馬手樂」「提琴」「三絃」とほぼ同様の文章を見出すことができ、この三編は共に潘の作であることが判明した（注1）。

「三絃」は「絃靴——即今之三絃 為張聘夫作」と題して、「提琴」は「縣解——為楊仲修提琴作」と題して、「馬手樂」はそのまま「馬手樂」と題して収められている（『鸞嘯小品』中の「絃靴——即今之三絃 為張聘夫作」の文は一部分文章が欠落している）。即ち『絃子記』は、『亘史（亘史鈔）』あるいは『亘史・天啓版』からこの三編を抜き出し、その内の二編の標題名を変え、柳宗元撰の「箏郭師」と合わせ、「唐 柳宗元撰・潘之恒閲」としたものであると考えられるのである。

潘之恒は、字を景升といい、嘉靖三十五年（一五五六）に生まれ、天啓二年（一六二二）に亡くなっている。汪效倚・輯注の『潘之恒曲話』によれば徽州・歙県の商人の家庭に生まれているが、若い時から汪道昆、王世貞に師事し、湯顯祖、屠隆等多くの知識人と交遊があった。潘自身については多くの研究論文があり、また前掲、汪效倚・輯注の『潘之恒

曲話』にも年表等も付いて詳しいのでそれらを参照されたい。また、『絃子記』の由来等は紙幅の関係上次の機会を持ちたい。

尚、この三編は、清初の黄宗義『明文海』にも、「十反」「提琴」「三絃」とタイトルを変え、潘景升撰（景升は潘之恒の字）として収められている（注2）。

二 潘之恒における「絃鞞―三絃源流説」の再検討

このように柳宗元の著作とされている『絃子記』には、潘之恒の文が三編収められていることが判明した。その中の『絃子記』云う所の「三絃」、乃ち『亘史（亘史鈔）』『亘史・天啓版』に収められている、標題名「絃鞞―即今之三絃 為張聘夫作（絃鞞―即ち今の三絃である 張聘夫の為にこの文を作る）」の文中で潘は「絃鞞」に関して次のように記している。

周樂器設播鼗職、業所及制、用絲結為繩、如貫珠垂雙耳、揺之還擊其面以成音、協於鼙鼓之節、自周失職武入於漢、至秦末改此器、引絲而長之以為絃、加一以象川、義標出其上、如繭之吐絲、去鼗革代以蛇腹、象仰孟承槃、名曰絃鞞、絃取諸乾、軫取諸坤、紀之三、以行宮音之主也

「周の樂器では、播鼗の職が設けられていた。業（わざ）の制（樂器の作り）に及ぶところは、糸を用いて結び繩のようにし、それは貫珠（糸を通した玉）が両耳に垂れ下がっている様である。之を揺らして鼓面を打って音を出し、鼙鼓の節目に協す。周の礼樂が乱れ、職が失われて播鼗の武が漢中に行ってしまうから（注3）、秦末になりこの器（鼗鼓）が改められた。糸を引いて之を長くして絃と為し、一本を加え、川を象った。棹のような柄がその上に出ているのは、繭から絲が引き出されているようである。鼓面の革を取り去り、代わりに蛇の腹の皮にした。形は孟（丸く凹んだ皿）を仰いで槃（とかき）の棒を付けたようである。名を「絃鞞」と云う。絃は「乾」を表し、軫は「坤」を表す。これを三と紀め、以て宮音の主たるを行うのである」

「絃鞞」に関してこれ程具体的な記述は、明代までの中国音楽史のなかでは、恐らくこれ唯一であろう。播鼗とは、『周礼』（春官宗伯・瞽矇）の鄭玄注に「播謂發揚其音」とあるように、所謂、振り鼓である「鼗（鼗鼓）」を振って音を鳴らすことである。その「鼗」の

柄を棹にして、鼓面を円形の胴に見立て、その胴の革を蛇の腹の皮に替え、鼓面を打つ玉の紐を絃にした「絃鞀」と云う絃楽器が秦代の末に現れ、その「絃鞀」を正に三条の絃を持つ三絃の楽器であったとしているわけである。丸い凹んだ皿に槩（とかき）の細長い棒を付けた形は正にその楽器の姿を彷彿とさせる。そしてその絃を「乾」に、軫つまり軫手（てんじゅ・絃巻き）を「坤」に準えている。八卦の「乾」は ☰ 「坤」は ☷、三本の形は正に絃と軫にはびったりである。

潘は「絃鞀―即今之三絃 為張聘夫作」と記しているように、明代の「三絃」の源流をこの「絃鞀」に求めているが、「絃鞀」と云う言葉が最初に現れたのが、周知のように現在残されている書物の中では梁・沈約の『宋書』なのである。『宋書』卷十九・志第九・樂一の「琵琶」の条に、三国・魏の杜摯（字 德魯、生没不詳、二五五年頃没）の言として次のように記されている。

琵琶・傅玄琵琶賦曰、漢遺烏孫公主嫁昆彌、念其行道思慕、故使工人、裁箏筑為馬上之樂、欲從方俗語、故名曰琵琶、取其易傳於外國也、風俗通云、以手琵琶因以為名、杜摯云、長城之役、絃鼗而鼓之、並未詳執實、其器不列四廂

の
「琵琶・傅玄の琵琶賦に曰く、漢（武帝）が、（烏孫）公主を遣わし昆彌に嫁がせた。その道すがらの寂しさを思い、工人に命じ、箏や筑を割いて馬上の楽器と為した。地方の俗語に従おうとしたので、故に名は琵琶と云う。その扱い易さで外国に伝わった。風俗通云うには手を以て琵琶、琴とすることから名付けられた。杜摯の云うには、長城の労役の時、絃鼗を弾いていたと。それらは孰れが事実なのか、未だ詳らかではない。その楽器は四廂樂歌には列していない」

また、『初学記』徐堅（六五九―七二九）等奉勅編・卷十六・樂部下・琵琶第三に引く、『古今樂録』（佚書）には次のように記されている。

智匠古今樂録曰、琵琶出於**絃鼗**・杜摯以為興之秦末、蓋苦長城役、百姓**絃鼗**而鼓。「智匠の古今樂録に曰く、琵琶は**絃鼗**から出ている・杜摯は秦末に興ったとしている。思うに、長城の労役に苦しみ、農民が**絃鼗**を弾いていたのである」

これらの記述以来「絃鼗」は「琵琶」の源流と見なされ、後世の様々な書物に認められる。勿論ここで云う「琵琶」は、林謙三氏謂う所の「漢式琵琶」のことを指す（林 一九七三 三〇八―三一六頁）。

以下、この「絃鼗」の文字が現れている書物、及び文章を判るかぎり取り上げてみる。尚「絃靴」は、書物に依って「絃鼗」又は「弦鼗」と記されていることが多いので、原文の表記に従う場合は「絃靴」とし、それ以外は便宜上すべて「絃鼗」と記す。

「琵琶賦」隋・虞世南（五五八―六三八）、『初学記』唐・徐堅（六五九―七二九）等奉勅編（約七二五年頃成書）、『通典』唐・杜佑（字君卿、七三五―八一二）撰、『白氏六帖事類集』唐・白居易輯（八三〇年頃成書）、『琵琶録』『樂府雜録』唐・段安節撰（生没不詳）、『舊唐書』五代後晋・劉昫（八八七―九四六）等奉勅撰、『太平御覽』北宋・李昉（九二五―九九六）等輯（九七七年編、九八三成書）、『新唐書』北宋・歐陽脩（一〇〇七―一〇七二）等奉勅撰、『事物紀原』北宋・高承撰（一〇八〇頃成書）、『樂書』北宋・陳暘撰、『通志』北宋・鄭樵（一一〇四―一一六二）撰、『唐宋白孔六帖』南宋・孔傳續輯、『記纂淵海』南宋・潘自牧輯（一二二〇頃輯成る）、『新編古今事文類聚』南宋・祝穆輯（一二四六序）、『古今合璧事類備要』南宋・謝維新撰（一二五七序）、『玉海』南宋・王忠麟（一二二三―一二九六）撰、『新編事文類聚翰墨大全（全書）』元・劉応李編（一三〇七初刊）、『文献通考』元・馬端臨撰、『李卿琵琶引』元・楊維禎（一二九六―一三七〇）、『說郛』元・陶宗儀（一二二九―一四一〇）撰

明代萬曆・天啓頃迄では、『新刻古今事物考』王三聘撰、『新刻詩學事類』李攀龍輯、『古今説海』陸楫編、『事物紺珠』黄一正輯、『古今律曆考』邢雲路撰、『彙苑詳註』王世貞撰、『山堂肆考』彭大翼輯、『唐類函』俞安期纂、『天中記』陳耀文輯、『事言要玄集』陳懋學纂、『古儷府十二卷』王志慶撰、等の書物に「絃鼗」の記述が認められる。

紙幅の関係上個別の文章は取り上げられないが、類書を始め様々な書物に「絃鼗」という言葉が現れている。しかし潘の云うように、「絃鼗」を蛇皮の胴を持つ三絃の楽器と記しているものは一書も無い。そして又「絃鼗」の形に関して潘のような具体的な記述は、現在残されている書物の中では、高承の『事物紀原』以外見つけることが出来ない。その巻二・樂舞聲歌部・嵇琴（けいきん）の条には次のように記されている。

杜摯賦序曰、秦末人苦長城之役、**絃鼗**而鼓之、記以為琵琶之始、按鼗如鼓而小、有柄長尺餘、然則繫絃於鼓首而屬之於柄末、與琵琶極不彷彿、其狀則今嵇琴也、是嵇琴為**絃鼗**遺象明矣・・・今人又號嵇琴為秦漢子・・・

「杜摯の賦の序に曰く、秦末、人びとは長城の労役に苦しみ、**絃鼗**を弾いていた。これを琵琶の始めであると記している。思うに鼗は鼓のようであるが小さく、長さが一尺余りの柄が付いている。鼓の端から絃を繫いで柄の末に取り付けると云うのであれば、それは極めて琵琶と似通っていないであろう。其の形状は今の嵇琴である。この嵇琴が**絃鼗**の形状を今に残しているのは明らかである。・・今の人にはまた嵇琴を号して秦漢子としている」

潘自身もこの『事物紀原』から「絃鼗」に関して具体的な記述の発想を得たのかも知れない。しかしこの『事物紀原』では、確かに「絃鼗」を「鼗鼓」の柄に絃を張ったものとはしているものの、その形状は、今（宋当時）の「嵇琴」である、と述べている。「嵇琴」は前掲、陳暘の『樂書』にも「奚琴」として取り上げられている二絃の擦絃樂器であり、勿論ここでも三絃であるとも、蛇の腹の皮を張ったとも記されていない。

『鐵崖古樂府』卷二に収められている、元・楊維禎の詩「李卿琵琶引」の序に「朔人李卿、以**絃鼗**遺器鳴於京師、嘗為李漑之學士、賞識賜以清平樂章、今年予逢卿・・・」とありその詩中に「今年東游到吳下、**三尺檀龍**為予把・・・」と記されていて、この「**絃鼗**遺器」「**三尺檀龍**」を楊蔭劉氏は元代の「三絃」についての記述とされている（楊、一九八一、下冊、七二五頁）。もしそうであるならば、この楊維禎の「李卿琵琶引」は「三絃」を「**絃鼗**」に結びつけた最も早い記述となるので、潘もこの詩を発想の源とした可能性もある。しかしその詩中に於いても「**絃鼗**」が三絃とは記されていない。又、これには「**絃鼗**遺器」を「三絃」と看做さない説もある（孫、二〇〇七、三五―三八頁）。

それにもまして、その「**絃鼗**」の様々な記述の行き着く所は『宋書』である。その『宋書』に於ける、前掲した杜摯の「**絃鼗**」に関する一文が、実際に傅玄の「琵琶賦・序」に記されていた記述なのか、『宋書』の編纂者の記述なのか定かではない。しかしどちらであったとしても杜摯のいかなる書物からの引用なのか未だ判らず、その根拠が確認できない。同じ『宋書』卷十九に杜摯の「**筋賦・序**」と思われる記述が認められるので、恐らくは杜摯の「琵琶賦」なるものがあり、その「**序**」から傅玄、もしくは『宋書』の編纂者が引用

したのかもしれない。しかし「箛賦」が現在も『大唐類要（北堂書鈔）』や『藝文類聚』等に伝わっているのは異なり、杜摯の「琵琶賦」は伝わっておらず、これも定かではない。

秦の時代から四〇〇年以上の時間が経っている魏の杜摯がいかなる書物を参考にして「絃叢」と言い出したのか知りようが無い。現在伝わっている秦・漢の書物の中で「絃叢」の記述がなされた書物を管見の限りでは見つけられない。杜摯の生きた時代にこのような楽器を「絃叢」と言っていたのか、それとも秦代に「絃叢」と呼ばれていたことを、書物を通して杜摯が知ったのかそれも判らない。「箛賦（序）」には、「箛」は李伯陽（老子）が西戎に入つて造つた、等と付会のようなことが記されているので、この「琵琶賦・序」と思われる記述も信用に足るものなのか判らず、「絃叢」は杜摯の造語とも考えられるが、前掲『宋書』の記述や陳・釈智匠『古今樂録』の「琵琶出於絃叢」の記述以来、多くの古の文人達が確かな検証もなくこれらの一文を引用して書き継いで来た様に思える。

西域から伝わった物ならば、秦代前後に当時西域の貿易を支配していた月氏の民によつて伝わり（小谷、一九九九、一九―四六頁）、その形が中国の鼗鼓を逆さまにして絃を張つた様だったので、いつのまにか「絃叢・叢に絃する」と呼ぶ様になったとも考えられるが推測の域を出ない。近年、中国に於いて最も早い時期の「絃叢」の図像として四川音楽学院出版の『音楽探索』に高文氏が提出された漢代の画像磚があるが（高、一九九八、一六―一七頁）、今のところこの図の歴史的考証は為されていない。前掲、唐・段安節『樂府雜録』の鼓吹部に「絃叢」が鹵簿（天子の行幸）に用いられていることが記されているが、唐の時代に実際に「絃叢」が用いられていると記した書物は、管見の限りではこの『樂府雜録』以外見当たらない。それ故この「絃叢」が今回取り上げている「絃叢」と同じものを意味しているのかは確信が持てず、誤刻と云う可能性も捨て難い。「漢式琵琶」を詠じた「琵琶賦」は、傅玄（二一七―二七八）、成公綏（二二一―二七三）、孫該（？―二六一）等、魏晋時代のもものが幾らか残されているが、「絃叢賦」もしくは「三絃賦」なるものはない。また前掲、高文氏のもの以外に「絃叢」の考古学的な確かな事例も発見されていない。

明代には現在失われてしまった書物がもしかしたらまだ数多く残されていたのかもしれないが、潘のこの文を以て「絃叢」の存在の確認とすることは出来ないし、ましてや「絃叢」を三絃の楽器であると証明することも出来ないものである。明代の楽器「三絃」の源流を、未だ存在不確かな「絃叢」に求め、その「絃叢」を三絃としていることは、まったく根拠が無い潘のロマンであったと言わざるを得ない。

三 毛奇齡の『西河詩話』との関係

中国では、已に沈知白氏のように「絃叢」を「三絃」の源流とすることに否定的な説もあり（姜椿芳・趙佳梓、一九九四、三〇八頁）、現在実際の事例としては「三絃」の始まりを遼、金代辺りとするのが出来ると云うことであるが（注4）、これに反して、この「絃叢」の存在を認め「三絃」の源流としている説も少なくない（注5）。秦の時代辺りに、二絃であった「絃叢」なる楽器が先行して現れ、何がしかの楽器の影響を受け、三絃に変化した、ということであれば、その何百年の間に、書物上に於いても実際の事例に於いても何がしかの痕跡があるはずである。前掲した「漢式琵琶」の三絃のものならば確かにその事例を幾らか見出せるのである。

現在のこのような「絃叢—三絃源流説」には前掲、楊維禎の詩「李卿琵琶引」や、又清初の学者毛奇齡（字大可 又は斉宇、一六三—一七二六）の『西河詩話』中の「三絃」の記述はよく引き合いに出される。しかし、潘のこの「絃靴」の記述をとっている説は見当たらない。その『西河詩話』にはこのように記されている。

「三絃起於秦、本三代叢鼓之製、而改形易響、謂之絃叢……唐時坐部多習之、故世遂以為胡樂、實非也」

三絃は秦に起きた。三代（夏・殷・周）の叢鼓の作りをもとに、形を改め響が変わった。これを絃叢と云う……唐の時代、座部の多くが之を習った。故に世の中では西域の楽器と思われているが実はそうではない。

毛自身は「絃叢」を三絃とはしていないが、この「三絃」の三本の絃から転じて「絃叢」三絃の説が出て来ているのかも知れない。さらにそこから推論するに、この「三絃」を「絃叢」に結びつけた毛の記述は、あるいは毛が潘の文から着想を得たものだと考えられはしないか。なぜなら『西河詩話』中の「三絃」の記述に続いて記されている「提琴」についての文には、前掲した潘の「提琴（縣解—為楊仲修提琴作）」の文と一致している箇所が多く、毛が『絃子記』か『亘史』、もしくは『鸞嘯小品』を見ていた可能性が非常に高いと考えられるからである。

例えば、『絃子記』の「提琴」と毛の『西河詩話』の「提琴」についての文のそれぞれの

冒頭は次のようになっていた。

『絃子記』の「提琴」

雲間馮大行使周府王餽樂器一具携以歸……有**二絃而龍其角絲自口中出魚皮腹**

木背**幹則花梨而象飾之麗以弓而繫其絃……衆昧其名……延楊仲修賞焉仲修者婁**
之審音者也……

『西河詩話』

提琴則起于明神廟間有雲間馮行人使周王府賜以樂器其一即是物也……**製用花梨**
為幹飾以象齒而龍其首有兩絃從龍口中出……衆昧其名太倉樂師楊仲修能識古樂
器……

紙幅の関係上全文を比較出来ないが、このあとに記されている文もその内容がかなり似通っている。潘以前に「提琴」の興りについて書かれた著作は見当たらず、これ程に文字が一致していることを考えれば、やはり毛が潘の文を模倣したとしか思えない。それ故に毛の、鼈鼓から変化した「絃鼈」を「三絃」の源とした記述も、毛が「絃鞞—即今之三絃為張聘夫作」の文から着想を得たものであることは、十分に考えられる。もし「三絃」の源流論に毛の「三絃起於秦……」の文を取り上げ、根拠の一つとするならば、潘の文との関係を検証せざるを得ないであろう。

このように「絃鼈」については現在に於いても様々な説がある。しかし、その賛否はともかく「絃鼈」を「三絃」の源流とし、そしてまた三本の絃を持つ三絃の撥弦樂器であったことを、潘は已に四百年程前にイメージしていたのである。

四 おわりに

以上のように、唐の柳宗元撰とされている『絃子記』に収められた四編の内、三編はその校閲者とされた明の潘之恒の文であることが明らかになった。但し、その内の一編を「絃鞞・即今之三絃 為張聘夫作」と題しているように、潘は明代の「三絃」の源流を「絃鞞」に求めている。しかしその認識には疑問を抱かざるを得ない。中国では現在に於いても「絃鞞」を「三絃」の源流と看做す説も多いが、潘の説に批判を加えることは、即ち現在のこ

のような説にもまた疑問を呈することに繋がる。

只「絃靴―三絃源流説」の賛否はともかく、「三絃」と「絃靴」との関係について、また「絃靴」の形について、明言をしたのはこの潘が最初なのである。現在の「絃靴―三絃源流説」には、清初の学者である毛奇齡の著作『西河詩話』中の「三絃」に關した文が、根拠の一つとされよく引き合いに出されるが、この潘をとり上げている論文を見る事はない。しかし毛の文は潘の「絃靴・即今之三絃 為張聘夫作」の文から着想し模倣した可能性が高い。潘謂う所の「三絃」と「絃靴」との関係が批判されれば、取りも直さず毛の説が批判されると云うことになるのである。

最後であるが、貴重な時間を割いて根気よく付き合ってくれた、早稲田大学文学学術院の岡崎由美教授のご指導とご教示に誠に感謝を申し上げます。また、今回の原稿執筆のきっかけを作ってくれた、要約の英文翻訳をお願いした、南シベリア・トゥバ民族音楽・演奏家の等々力政彦氏に重ねてお礼を申し上げます。

注

- (1) 現在『亘史』は、『亘史鈔』と『亘史・天啓版』の二種類あり、その一つの『亘史鈔』はもとの巻数は未詳であるが、『四庫全書存目叢書』に収められ、一一六巻が残されている。もう一つの『亘史・天啓版』は潘之恒の四番目の息子の潘弼亮によつて天啓六年（一六二六年）に刊行されたもので、九三巻から成っている。また『鸞嘯小品』は、汪效倚氏の『潘之恒曲話』によれば、潘之恒の五番目の息子の潘弼時が『亘史』の残編を可能な限り集めたもので、崇禎戊辰（一六二八年）の韓上桂の序がある。

- (2) 『明文海』巻百四十六・諸體文「六」では、「絃靴―即今之三絃 為張聘夫作」は「三絃」に、「縣解―為楊仲修提琴作」は「提琴」に、「馬手樂」は「十反」にとそれぞれ標題名が変えられ、少し文章を省いた形で収められている。

- (3) 『論語』第十八・微子に、次の様に記されている。「大師摯適齊 亞飯干適楚 三飯繚適蔡 四飯缺適秦 鼓方叔入於河 **播鼗武入於漢** 少師陽 擊磬襄 入於海」。潘之恒はこれを踏まえている。

- (4) 北京房山縣雲居寺の遼代の石塔（一九九二、『中国樂器圖鑑』、濟南、山東教育出版社、一六八頁）また四川庵元縣羅家橋南宋墓（一九八八、『中国音樂史圖鑑』、北京、人民音樂出版、一二七頁）等参照。

- (5) 中国に於いて「絃叢——三絃源流説」を採っているもの、又は是認しているものは、牛龍非（一九九一、『敦煌壁画音楽史料説録与研究』、楊蔭劉（一九八一、『中国古代音楽史稿』、下册）、鄭祖襄（二〇〇五、『絃叢——研究的争議与討論』、『中国音楽学』、一期）、王耀華（一九九八、『中国の三絃とその音楽』。また、孫寧寧「三尺檀龍 是三絃嗎？——對史学界三絃定論的重新認識」の注五に依れば、楽声（一九八六、『三絃』、『中国音楽』、一期）、黄仕中（一九八九、『試論大三弦的發展』、『音楽探索』、二期）、劉慧（一九九八、『三弦發展概略』、『天籟・天津音乐学院学报』、四期）、王州（二〇〇三、『絃叢遺制一脉千支——中国的三弦』、『福建芸術』、四期）

参考文献・引用文献

- 汪效倚、一九八八、『潘之恒曲話』、北京、中国戲劇出版社
『論語』、魏何晏等集解、四部叢刊、第三十八冊、三十九冊 上海商務印書館影印
姜椿芳・趙佳梓、一九九四、『沈知白音楽論文集』、上海、上海音楽出版社
『事物紀原』、宋高承撰、叢書集成初編、上海商務印書館影印
『明文海』、清黄宗羲輯、四庫全書珍本七集、故宮博物院藏文淵閣本影印
高文、一九九八、『我国最早的絃叢圖像』、『音楽探索』、成都、四川音乐学院、第二期
小谷仲男、一九九九、『大月氏』、東京、東方書店
『周禮』、漢鄭玄注、四部叢刊、第十冊—十五冊 上海商務印書館影印
『初學記』、唐徐堅等奉勅編、一九六二、北京、中華書局標点本
『宋書』、梁沈約撰、中華書局鉛印本
孫寧寧、二〇〇七、『三尺檀龍 是三絃嗎？——對史学界三絃定論的重新認識』、『音楽研究』、北京、人民音楽出版社、第三期
林謙三、一九七三、『東アジア樂器考』、東京、カワイ樂譜
『西河詩話』、毛奇齡撰、昭代叢書、丙集第六帙、世楷堂藏板道光刊本
『鐵崖先生古樂府』、元楊維禎撰、四部叢刊、集部第二千三百二十、二千三百二十一冊、上海商務印書館影印
楊蔭劉、一九八一、『中国古代音楽史稿』、北京、人民音楽出版社
『唐柳河東集』、唐柳宗元撰・明蔣之翹輯注、明刊本

（秦琴演奏・作曲）

Pan Zhiheng's Views on the Origin of *Sanxian*

[Abstract]

A *xiantao* 絃鞞 is a plucked string instrument of which we have many historical accounts dating from the beginning of the sixth century. However, we lack an explicit description of this instrument. There is a section entitled “*Xiantao*—(now called *Sanxian*) : dedicated to Mr. Zhang Pinfu” *Xian-tao ji jin-zhi san-xian wei Zhang Pin-fu zuo* (絃鞞·即今之三絃為張聘夫作) (abbreviated as XT) in *Fables* (*Zhi-yan* 卮言), the eighth chapter of *Miscellaneous* (*Za-pian* 雜篇), in the book of *Gen-shi chao* 亘史鈔 “the Excerpt from *Genshi*, the Various Anecdotes,” which was written by Pan Zhiheng 潘之恒 (1556–1622) during the Ming Dynasty. As this title indicates, Pan Zhiheng considers the *xiantao* as the precursor of the *sanxian* 三絃 in the Ming Dynasty. Further, there is a book called *Xian-zi ji* 絃子記 (abbreviated as XZJ), which has been overseen and corrected by Pan Zhiheng and is believed to have been written by Liu Zongyuan 柳宗元 (773–819) during the Tang Dynasty. XZJ is a concise text consisting of four sections.

In XZJ, I discovered a section identical to XT, albeit under a different title— *Sanxian*. A detailed investigation shows that among the four sections of XZJ, three sections, including the one mentioned above, are found in *Fables*, which was also written by Pan , who was regarded as the reviewer of XZJ. The musical instruments discussed in XZJ, such as the three-stringed long-necked lute called *sanxian* and a bow instrument known as *tiqin* 提琴, are believed to have not yet appeared in the Tang period. Because of this ambiguity, the origins these musical instruments could have been dated as much older than they actually were.

In this paper, I refer the source of XZJ, discuss XT in detail, and clarify that Pan's belief that the *xiantao* is the forerunner of the *sanxian* does not have any historical basis.